

フォレスターズシンドロームと森林環境研究

森林環境部長 大角泰夫

フォレスターズ・シンドローム、「やま官症候群」とでもいうか、以前 JICA 林業水産開発協力部長だった渡辺桂氏の言葉である。大きな通直の針葉樹、ていていと続く人工林、すばらしい成長、林業家はそれを好み、自己陶醉に陥り、他との接触少なく、孤高を守りがち、というような内容が含まれていると記憶している。

日本が世界に誇れる財産、1000万haの人工林造成の中核であった旧林業試験場土壌部の一員として造成研究にわずかながらでも携わった経験から、渡辺桂氏の指摘が痛いほどよく分かる。すり込み現象か、依然としてそのくびきから完全には抜け切れていないことを自覚する。

林政審議会は、国有林の改革を中心に、森林の今後の利用について従来の生産重視の方向を、環境財や公共財の利用も等しく重視する方向に定めるよう、提言した。森林総合研究所は、森林を環境や公共へもっと利用を、という社会の要請を先取りして、昭和63年に本・支所あわせ120名にも達する森林環境研究に携わる者をまとめる本部機能を再編し、森林環境部を形成した。林政審提言の中で、森林環境研究は充実を求められる中心にあり、社会に対してより多様で効果的な成果を上げなければならない責務を担っている。

しかし、戦前から戦後、180度の思想転換を余儀なくされた方々の苦しみほどではないにしろ、初心忘れずのたとえ通りすり込まれた考え方から抜け出すのは容易ではない。筆者に限ることかもしれないが、頭で理解していても実際の行動や言動はその通りにはなかなか行かない。他にも筆者と似た考え方の先生に教えられ、すり込まれた若い方々もいるのかな、とも思う。

森林環境というキーワードについても、森林が作り出す空間の時間との関わりという無機的な世界だけなのか、その空間と人や人の集合体である村落や都市との有機的なつながりまで視野に入れるのか、おそらく後者だろう。もしこの視点が求められているとすれば、今森林総合研究所が進めている森林環境研究は、過去から進めてきた無機的な世界を中心としすぎてはいないだろうか。昨今、循環型社会が喧伝されている。循環の基本である「物質循環」は森林環境研究分野が作り出した言葉である。この言葉をもう一度かみしめ、人と森林との共生に森林環境研究がどのような形で生かせるのか、フォレスターズ・シンドロームをフォレスターズ・ドリームに変えられないか考えてみたい。

時あたかも行政改革のさなか。森林総合研究所も独立行政法人として再来年には新たな出発を迎える。独立行政法人化は進歩のための神風がもしれない。過去を大切にしながら、新たな森林環境研究を始める機会を与えてくれた神風がもしれない。アメリカの経済学者、サローは進歩の段階で、「破壊と創造」が大きなキーワードとなるとしている。その上で、サローは人々の「失敗をおそれぬ勇氣」と「それを可能とする仕組み」が重要と付け加えている。今度の独立行政法人化にも、研究者が勇氣をだし、結果としての失敗を成功に結びつけられる仕組みを作れないかな、と夢を見ている。減点主義ではなく、加点主義で先に進みたいものだ。

